「話す」「書く」「読む」「聴く」「考える」

英語5技能を総合的に高め 世界で活躍できる英語力を養う J PREP式英語学習法

中高生を主対象とした「J PREP 斉藤塾」、未就学児のための「Sunnyside International Kindergarten」、学童保育と英語塾の機能を備えた小学生向けアフタースクール「J PREP KIDS」を展開しているのが「J PREP グループ」。未就学児から中高生まで一貫して指導する体制を築き、年齢に応じたきめ細やかな指導を行っている。入塾希望者が殺到している同グループの人気の要因に迫った。

J PREP斉藤塾代表
斉藤 淳（さいとう じゅん）氏
上智大学外国語学部英語学科卒業、イェール大学大学院博士課程修了、Ph D。

ネイティブ講師と日本人講師がペアになって授業に取り組む

東大出身者でも海外大学の授業に苦労する

「J PREP 斉藤塾」が誕生したのは2012年。まだ新しい英語塾だ。斉藤淳代表は起業の理由をこう語る。

「イェール大学在職時代に、日本出身の大学院生が、東大など最難関大学卒業生であっても議論に十分に参加出来ず、苦労している様子に衝撃を受けました。ディスカッションだけでなく、論文もなかなか捗らない。読解力も決して高いとは言えない。日本の英語教育に大きな問題があると危機感を覚え、自らの手で、生徒の知的可能性を伸ばす英語塾を設立しようと決意したのです。」

斉藤代表は、学部生、大学院生として8年間、アメリカで学び、その後、イェール大学助教授として政治学を教えていた。そんな経歴を持つ人物の言葉だけに重みがある。

では、日本の英語教育のどこに問題があるのだろうか。

「文法を教え、訳読させる19世紀型の英語教育が続けられてきました。読解力養成に偏重していたわけですが、実は読解力すらも身についていません。TOEFLの国別の読解力スコアを見ると、日本は下から数えた方が早いほどです。最近はコミュニケーション力を重視した教育に移行する学校が目立っていますが、そうなると今度は、文法がおろそかになってしまっています。常にバランスを欠いた指導法に陥っているのです。」

生徒の質問に講師が丁寧に答える

「WHY」から始まり「考える」力を高める授業

「JPREP 斉藤塾」の最大の特色は、「話す」「聴く」「読む」「書く」の4技能に、「考える」を加えて、総合的に英語力を高める教育が行われていること。「考える」をプラスしたのは、これからの時代を見据えた教育に不可欠だからだ。

「AI（人工知能）、ロボット技術が急速に進歩する時代にあって、人間が果たすべき役割は、多様な価値観や意見を集約し、判断を下すことです。その前提として、論理的思考力と表現力を磨かなければならないのですが、これは日本型教育の弱点でもあります。しかも、トップクラスの生徒でも、テキストに書かれていることや、先生から教えられたことは正しいと鵜呑みにする傾向があります。批判的に思考する力がなければ、世界で活躍することはできません。」

「JPREP 斉藤塾」の授業は、レベル0（英語入門コース）からレベル7（留学準備または国内大学受験準備）まであり、1クラス20人以下の少人数制を徹底している。授業の随所で、その日扱うテーマについて、講師から「WHY」と問いが投げかけられる。生徒は一人ひとり自分の意見を発表し、その後、皆でディスカッションする。大学のゼミのような形式だ。

扱うテーマも興味深い。レベル4では、西洋近代史のテキストを使い、「産業革命の過程で、西欧はどのようにして世界的覇権を確立したか」といったテーマで議論する。レベル5になると、人類学のテキストで、生命の起源について、自分が持っている知識を総動員して、見解を語り合う。きわめて高度で、学際的な学びを実現している。その中で、自然と批判的思考力が養われていく。

「教科の縦割り意識が強いところに、日本型教育の課題があります。アメリカの進学校では、政経の授業で、経済学の理論を教える際に、数学の微積分を使うのがむしろ一般的です。当塾の授業も、CLIL（内容言語統合型学習）と呼ばれる、他教科を英語で教え、考えさせるスタイルになっています。」

もちろん、英語初学者対象のレベル0や1では、いきなり議論を課すのは難しい。スティーブ・ジョブズの伝記など、生徒が興味を持ちそうなテキストを読む。それでも、しばらくすると、臆することなく英語で発表するようになる。ジェスチャーも含め、プレゼンテーションの作法も時間をかけて指導している。

大学受験文法だけでは世界で活躍することはできない

もうひとつ、5技能を総合的に習得する上で、決して無視できないのが、実践的な文法知識である。

「JPREP 斉藤塾」では、けっして文法を軽視してはいない。ただし、大学受験で得点できればそれで良いという浅く狭い文法知識ではなく、即戦力として通用する深い知識を音声とともに身につけるよう指導している。受験参考書で例文を丸暗記してそのまま使っても、人間関係

ネイティブ講師が語る

クリティカルな思考を身につけ社会に出て成功するためのスキルと実力を養ってほしい

グレイソン先生　斉藤先生　カトリー先生

グレイソン先生は、ロンドン大学を卒業し、J PREPで東大受験指導、上級クラスを担当。カトリー先生は、ボストン大学大学院でMBAを取得。J PREPでは留学準備指導、SAT、TOEFLの受験指導を行っている。

ネイティブ講師を代表してグレイソン先生とカトリー先生に本物の英語力を身につけるために必要なことをテーマに斉藤先生とともに語っていただきました。

斉藤　日本のこれまでの学校教育に原因があるのか、日本人の英語力には大きな偏りがあるようです。お二人がこれまで気づいたことについて教えてください。

カトリー　アメリカで留学生に英語を教えていたとき、日本人学生のほぼ半数以上が、最初の授業のあとに「私には難しすぎる。レベルを落としてください。」と言ってきたのを覚えています。学校教育で読み書きや暗記に重点が置かれていたため、教室で日常的なやりとりをする力が欠如していたんですね。

グレイソン　私は日本で交換留学生として学んでいたのですが、日本のトップクラス大学の学生でも、英語が話せない、もしくは話そうとしないことに驚きました。間違えることを恐れると同時に、外国人と話すことそのものに抵抗感があったようです。

カトリー　外国語を習得するにあたり、間違いを経験することは非常に大切です。そこから学ぶことがとても多いのですから。

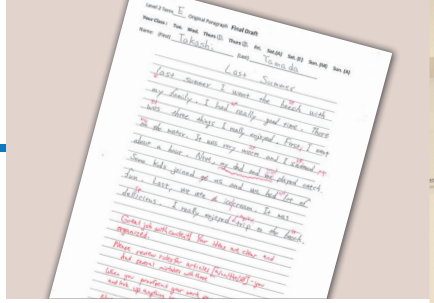
グレイソン　「英語が話せるようになる」ことを目標とするのではなく、自分の夢を実現させるツールとして英語を学ぶという意識も必要です。

斉藤　日本の学校の授業は、教師が生徒に一方的に説明するスタイルが多く、生徒がクリティカルに物事を考える機会が与えられません。その点も英語圏の学校との大きな違いですね。

カトリー　「なぜそう思うのか。」「どうしてそうなったのか。」と考える姿勢ですね。単に英語を話すことができるというだけでなく、クリティカルに考える能力は、海外の大学で学んだり、国際社会で働いたりする際に非常に重要です。

グレイソン　日本人の生徒は多くの知識を持っていますが、それを外の世界で活用する手段を知りません。私たちがJ PREPでそれを指導していきたいと思っています。

斉藤　社会で通用するライティング力を重視しているのも、J PREP の特長です。単に入試でよい点を取るためだけのスキルを得るのではなく、大学で、社会で成功するための実力を養ってほしいですね。


毎週行われる英作文の添削指導

専用アプリを搭載したiPad 端末

に支障が出ることすらある。

「とくに怖いのが助動詞です。『You may come in.』と冷たく言い放ったりしたら、普通はびっくりします。『なぜそんな上から目線で言われないといけないのか。』と思うからです。機械的に助動詞＋動詞原形と、形式だけで文法を教えてしまう日本の英語教育の弊害です。私たちは、実際の場面で使うことを意識した文法を教えます。たとえば誰かに何かを頼む場合も、やんわりと頼む時と、少し命令的に言う時で、音声表現もあわせて使い分けられないと意味がないのです。」

大学合格がゴールではない。将来、グローバル社会で活躍できる英語力を養成したいという強い信念が感じられる。

家庭学習用アプリを開発 繰り返し学習も徹底

授業は週1回3時間だが、語学の習得には毎日のトレーニングが欠かせない。そこで、「J PREP斉藤塾」が開発したのが、家庭学習で利用できるLMS（家庭学習管理システム）である。これをインストールしたタブレット端末で、音声練習用のメニューを利用した発音練習や、スピーキング練習ができる。日常生活では、聞くだけの作業は少なく、相手の顔や仕種を見て、何を話しているか判断していることが多いので、動画教材が多用されている。生徒は、ネイティブ講師の発する音声を聴きとりそのまま再現するシャドウイングや、質問に英語で答える練習をして、その模様を録画して送信する。すると、生徒一人ひとりに対して、きめ細かく発音矯正のアドバイスが返ってくる仕組みになっている。

また、毎週、英作文の課題が出され、ネイティブ講師が添削して返却する地道な指導も行われている。短い文章からスタートして、アカデミック・ライティングまでレベルアップを図っていく。

語学習得には、こうした積み重ねが大事だが、それだけでは実践で使えるようにはならない。家庭学習が素振りだとすれば、授業はその成果を発揮するための試合なのだ。

授業指導をより円滑に行うために、独自にCMS（教室指導管理システム）を開発導入している。

授業の出欠・遅刻状況や、当日の小テストの結果などを、保護者がLMSで確認することができる。特筆されるのは、授業への参加態度を講師が評価し、学習管理用ウェブサイトを通じて、生徒保護者に随時開示していることだ。

「単純な管理目的ではありません。周囲が真面目に議論しているのに、ふざけているようでは困ります。普通の塾なら、テストの成績が良ければそれでいいと、注意しないかもしれません。私たちは厳しく指導します。将来、研究やビジネスで多国籍プロジェクトに参加した状況を考えて下さい。議論に加わらず無言を貫いたり、日本の中高生特有の斜めに構えて冷笑的な態度を取ったりしたら、相手にもされません。臨機応変に、口頭で主張したり反論する練習を重ねておかなければならないのです。もはや、ペーパーテストで得点できればそれで良いという時代ではないのです。私たちはあくまで、これからの時代を生き抜く上で必要なスキルを身につけて欲しいと願って指導しているだけなのです。」

渋谷校と自由が丘校に新館がオープン

「J PREP斉藤塾」は、現在ほぼ全クラスが満席で、空席待ちの入塾希望者がたくさんいる状況だ。2020年度からの大学入試改革で、英語は4技能を総合的に評価する入試に移行することが決まっており、さらに人気が加速する可能性が高い。

「新しい大学入試には、付け焼き刃で対応するのは困難です。長い時間をかけて、5技能をじっくり鍛える当塾の教育が強みを発揮するでしょう。」と、斉藤代表も自信を見せる。

高まるニーズに対応して、今年7月に渋谷校に新館をオープンした。さらに、10月には自由が丘校に新築5階建の新館を開設する。

「既存校舎と同様に、明るく開放的な雰囲気で、自由闊達な議論が展開できる環境を実現したいと考えています。」と、斉藤代表は語っている。

渋谷駅の交差点からは
J PREP渋谷校の
大きな看板が見える

information
J PREP自由が丘校10月に新館開校
入塾説明会のご案内
J PREPでは入塾待ちの生徒の皆様のご要望に後押しされ、2016年10月、自由が丘に新館を開校します。英語を学ぶより良い環境を整えて、海外留学、東大や医学部受験のいずれでも万全な指導を行います。ご興味のある方はぜひ入塾説明会へお越しください。

自由が丘校新館
日程
9/4（日）
9/10（土）
※詳細はホームページをご覧ください。

お問い合わせ J PREP斉藤塾 TEL.050-6861-5155 http://jprep.jp/

sunnyside International Kindergarten by J PREP

斉藤 淳（さいとう じゅん）先生　Trevor Root（トレバー ルート）先生

「読む」「書く」もマスター。

オールイングリッシュの環境で 母語に近い形で英語が身に付くキンダーガーデン

“目指すなら世界の頂点”を合い言葉に、ハイクオリティな英語教育を提供するJ PREPグループ。教育業界から高い注目を集め、常に“キャンセル待ち”という人気ぶり。これまで、小、中、高向けの教育を行ってきた同グループが、2016年4月、キンダーガーデンを新たに設立。Sunnyside International Kindergartenの特徴について、自由が丘の同園で設立者の斉藤氏と、同園長のTrevor Root先生にお話を聞いた。

――設立の経緯は？

斉藤：子どもに英語を学ばせたい保護者のニーズは、今までになく多様化しています。これに対して、適切な選択肢を提供するのが我々の役割だと考えています。Sunnyside International Kindergartenはその一環です。

――未就学児に対して英語教育を行う意義は？

斉藤：特に、「聞く」「話す」能力、発音も含めて、早期教育の利点は大きいと言われています。例えば、いちいち日本語に翻訳せずに英語で自然に応答する能力を効果的に身につけることができます。また、英語が話せるようになるだけではなく、主体性を伸ばし、自信を培う教育を行っています。この資質は、どんな進路を歩んだとしても、必ず活きてくると思っています。

ルート：子どもたちの感受性の豊かさや吸収力は驚くほどです。ミスを恐れず自信を持って英語を使い、自分の意見を発表するよう伝えています。

――他のInternational Kindergartenと違う特徴とは？

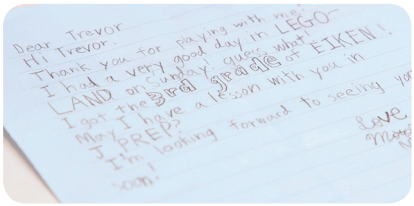
斉藤：大きな特徴として独自カリキュラムに沿って「読む」「書く」のトレーニングをしっかり行っていることです。6歳までの時期は、言葉を自然に身につける上で大変に重要な時期です。日本の小学校に進学して日本語環境になると急速に英語を忘れてしまう場合が少なからずありますが、英語の「読む」「書く」の基礎を身につければ、卒園後も、自ら読書や書くことを通じて英語力を維持・向上していくことが可能になるからです。

子どもの主体性を伸ばしながら、英語で自分の意見を発表

ルート：3歳からレベルを追って学んでいき、卒園の頃には英語で手紙が書けるようになります。一人ひとりのレベルや興味に沿って学んでいくので、子どもは熱意をもって学習できます。

斉藤：少人数教育でクラス編成がされていることも特徴ですね。一クラスあたりの生徒数は主体性を育てる教育にとって大切な指標なのです。

ルート：具体的な教育メソッドとしてはCLIL（内容言語統合型学習）とよばれる、他教科を英語で教え、考えさせるスタイルを採用し、単に「英語を」子どもに教えるのではなく、“海洋生物”や、“コミュニティヘルパー”のように



読み書きを大切にしているSunnysideでは、卒園の頃には英語の長文が書けるようになる

にテーマに沿って、様々なアクティビティを通じて、自然に英語が身に付くように工夫しています。加えて大切にしているのは、文化の多様性を尊重していることです。その一つとして、日本の伝統と文化の中で育まれてきた慣習や道徳を学ぶことで日本人であることのアイデンティティを育むことも重要であると考えています。

――Sunnysideを卒園した後についてお聞かせください。

斉藤：J PREPグループでは小学生向けに「J PREP KIDS」というアフタースクール（学童保育）があり、日本の小学校に進級してからも継続して英語力を伸ばしていく環境を用意しています。一方、インターナショナルスクールに進学した子どもたちには、J PREP KIDSで、日本の学校のカリキュラムの補習機会も提供する授業を行っています。児童、保護者の多様な学習ニーズに柔軟に対応する環境を整えています。

――J PREPに通う生徒に目指して欲しいものとは？

斉藤：英語力はもちろん、リーダーシップを身につけてほしいですね。自分で判断が出来る、色々な背景や価値観を持つ人たちのなかで、主体性を持って説得できる力を持ってほしいです。

ルート：我々講師陣も子どもたちの好奇心を刺激し、学ぶことの楽しさを知ってもらえるよう日々愛情を込めて教育にあたっています。将来子どもたちが自分たちの得意分野をみつけて、グローバルに活躍することを期待しています。